「道、真理、命」
ヨハネによる福音書 14 章 1－14 節

　イエスさまは逮捕される直前、弟子たちに「わたしが行く所に、あなたたちは今ついてくることが出来ない」と告げられました。これを聞いた弟子たちは激しく動揺しました。そんな弟子たちに向かってイエスさまは、「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」と言われました。
　なぜ私たちは、心騒ぐのでしょうか。なぜ、この時、弟子たちはイエスさまの後に従っていながら、平安の中にいなかったのでしょうか。それは、神様との関係を結ぶことが出来ていなかったからです。父のもとへ行く道を見失っていたからです。

　イエスさまは、ご自身が十字架の道を歩み、それによって父なる神さまのもとに場所を用意しに行くと言われます。つまり、イエスさまご自身が、私たちのための場所を神さまのもとに用意し、私たちの救いを成し遂げると言ってくださっているのです。
　ところが、弟子たちは、救われるために自分がどのように歩むべきかを知ろうとして、イエスさまの後に従っていたのです。イエスさまの教えを求め、その教えを守っていくことによって救いに至る道を見出そうとしているのです。イエスさまは、ご自身が救いを成し遂げてくださろうとしているのに対し、弟子たちは、自分自身が救われるために歩むべき道を求めています。

　その弟子たちに向かってイエスさまは、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」と言われます。ここでイエスさまは、イエスさまが語られる言いつけを守って、自らの力で歩み通すことによって真理に到達し、命が得られると言っているのではありません。そうではなく、イエスさまご自身が道であると言われるのです。イエスさまの戒めを行い続けることによって救いが得られるのではなく、道そのものであるイエスさまを通ることよって、父なる神さまのもとに行くことが出来ると言うのです。
　もし、ただイエスさまが語られる教えを聞き、それを守り抜くことによって父のもとに行こうと考えているのであれば、それは結局、自分の力によって、父のもとに行こうとしているに過ぎません。様々な教えがある中で、主イエスの教えを選び取り、それを実践することによって父のもとに行こうとしているのです。それは、道であるイエス・キリストを通らずして、自分自身が主人となって道を判断し、その道を通って父のもとに行こうとすることです。それに対してイエスさまは「わたしこそ道である」と、はっきりとお語りになるのです。

　主イエス・キリストは私たちを招いておられます。「わたしこそが道、あなたの救いの道、あなたを救う道となった」と。
　この道は単に、天の父のもとに到達するための道、媒介する道だけではありません。もし、到達するためだけの道であるならば、私たちはその道をゴールまで歩み続けなければなりません。しかし、主イエス・キリスト御自身が道そのものなのです。ですから、この道そのものが私たちを連れて行ってくれるのです。だからこの道にいるならば、どんな人もたどり着けないなんてことはあり得ません。この道は、天へと通じる道でありつつ、すでに父のもとに至っている道です。それは、すでに今、天の父の家に道である主イエス・キリストがおられるからです。それゆえに、すでに今、私たちも、この地上にあって、天の父の家とつながっているのです。結ばれているのです。